

# 一九世紀初頭イギリスにおける地方政治団体

——リヴァプールの「同心協会」を中心に——

正 木 慶 介

## はじめに

一九世紀初頭におけるイギリス政党政治の重要な特徴の一つは、議会においてホイッグ党とトーリー党という二つの政党が徐々に支配的勢力となっていく、ヴィクトリア期に顕著に見られるようになる二大政党制の基礎が築かれた点にある。<sup>(1)</sup>近年の一九世紀初頭イギリス政党政治史研究は、このような二大政党による競合関係を前提に、そうした議会内権力闘争がどの程度（またはどのように）選挙区をはじめとした地域社会に影響を及ぼしていたかを考察する方向へと関心を移しつつある。

先行研究において、フランク・オゴアマンとジョン・

フィリップスは、地域差など諸偏差に注意を払いつつも、概して、特に大きな都市では、この時期に行われた議会選挙において有権者の党派的投票行動が顕著であったことを強調した。このように議会政治が地方政治に大きな影響を与えていたことを認める一方で、両者は、議会政党が直接的に地方政治に介入した例はあまりみられず、各地域社会における政治的自律性のもと議会政党と地方政治団体はゆるやかに結びついていたと論じた。<sup>(2)</sup>これに対し、地方の自律性を言説・理念・アイデンティティの観点から検討し直し、議会政党と地方政治団体の間に密接な関係性は認められないと主張したのがマイルズ・テイラーやジェイムズ・ヴァーノンである。特に前者は、オゴアマンとフィリップスが重要史料として用いた投票者名簿（poll books<sup>(3)</sup>）が可

能とするのは量的分析のみであり、この史料だけで各選挙区の有権者が議会政党政治に対し実際にどのようなと考えていたかを解明することはできないと指摘した。加えて、テイラーは、一九世紀のイギリス地方政治では地方の「独立性」が強調されることが多く、政党政治（もしくは政党そのもの）を嫌悪する政治文化が色濃く残っていたと論じた。<sup>(4)</sup>

こうした先行研究を踏まえ、本稿は、これまであまり注目されてこなかった議会選挙以外の地方政治のあり方に眼を向け、言説やアイデンティティの観点も考慮しながら、議会議党と地方政治団体の関係性を事例的に検討する。<sup>(5)</sup> 具体的には、一八一二年にリヴァプールに設立された「同心協会」(Concentric Society) という改革派政治結社に注目し、特に、この結社に集まった改革派がどのように、そしてどの程度、概して改革に肯定的であった議会ホイッグ党（もしくはホイッグ党政治家）と関係を持とうとしたのかを考察する。

## 第一章…同心協会の設立とその目的

リヴァプールは一二〇七年にジョン王から特許状を与えられ自治都市となった歴史ある港湾都市であり、一七世紀

半ば以降の大西洋貿易での成功を背景に、一九世紀初頭までにイギリスにおいてロンドンに次ぐ大都市へと成長した。<sup>(6)</sup> 議会選挙における投票権は正式市民 (freemen) に与えられ、その数は都市の拡大とともに増加していった。具体的には、一九世紀の最初の三〇年間で有権者数は約三〇〇〇から約四五〇〇へと膨らんだ。このように、リヴァプールには多数の有権者がおり、また彼らは全国的政治論争に敏感に反応する政治的意識の高い者で構成されていたため、特定の貴族や政治的パトロンによる支配は困難であった。一七八〇年から一八三二年の間にリヴァプールで行われた議会選挙（補欠選挙含む）のほとんど全てが競争選挙となったことは、その具体的例証と言えよう。<sup>(7)</sup>

同心協会は、一八一二年一月二日に設立された。設立の直接の契機は一八一二年の総選挙にあった。長期化する対仏戦争への不満の高まりが全国的な改革運動に結実してゆく中、与党トーリー党からジョージ・カニングとアイザック・ガスコイン、野党ホイッグ党からヘンリー・ブルームとトマス・クリーヴィイといった中央政治で強い影響力を持つ人物がこの選挙に立候補した。概してトーリーはイギリス国制を守るために戦争の必要性を訴え改革運動に反対したのに対し、ホイッグは平和と議会改革の重要性を強調する立場を示した。激戦の末トーリーが二議席を独占し、以後

長期にわたりトリーはリヴァプール政治において優位な立場を維持することとなった。しかし、改革派の抵抗運動も根強かった。同心協会の設立はそうした運動のあらわれの一つである。同心協会は以後、全国的に改革運動が衰退する時期とほぼ重なる一八二二年の年末まで、約一〇年間にわたり政治活動を続けた。

同心協会の指導的会員は、ユニテリアン派牧師ウィリアム・シユパード、地方紙『リヴァプール・マーキュリ』編集者エジャトン・スミス、ジョージ・ウィリアムズ大佐らであり、会員の多くは商人、銀行家、法律家などの専門職に携わる中産階級で構成された。同心協会は「三〇人の友人たち」によって開始されたが、以後会員数は一八一七年一月には約八〇〇、一八一九年には約一〇〇〇と増加した。会員の中には労働者階級も一部含まれた。会員は毎週の定期会合に加え、四季会合と創立記念年次晩餐会を開き討議を行い、そこでの議事を『リヴァプール・マーキュリ』を通じて公けにすることで公論に影響を与えようとした。<sup>(11)</sup>

同心協会の活動目的は多岐にわたっていたが、(一) 不戦、(二) 自由貿易、(三) 行財政改革、(四) 減税、(五) 政治参加に関する宗教的差別撤廃、(六) 議会改革に重きが置かれた。<sup>(12)</sup> また、同心協会は、活動期間中に発生した特定の問題に関して概してリベラルな立場をとった。例

えば、一八一九年八月にマンチェスターでいわゆる「ピーター・ルーの虐殺」と呼ばれる事件が起きた時は、議会改革支持派による公的集会を弾圧したマンチェスター市当局とそれを追認したトリー政権に批判の矢を向けた。<sup>(13)</sup> 加えて、一八二〇年から翌年にかけて全国的な争点となった「キャロライン王妃事件」では、王妃側に立ち、王妃の特権を奪おうとする国王ジョージ四世とトリー政権を批判した。<sup>(14)</sup> しかし、同心協会は、こうした複数ある政治目標の中でも議会改革が最も重要であると考えた。同心協会が年次晩餐会においてたびたび「我々協会の主要な目的、議会改革」や「あらゆる政治的不満に対する第一の万能薬、議会改革」といった祝杯をあげたのは、その好例である。<sup>(15)</sup>

議会改革とは、下院代表制度改革のことを意味する。下院代表制度の基礎は中世につくられたため、一八世紀の末までには、その制度がイギリス社会の現状に見合っていないと考える人々が多くなっていた。求められた改革案は多様であったが、特にリヴァプールのように正式市民のみが伝統的に有権者を構成する都市選挙区では、正式市民以外への参政権拡大を求める声が強かった。<sup>(16)</sup> それ以外にも、腐敗選挙区を廃止し議席をマンチェスターやバーミンガムなど代表を持たない新興都市に分配することや、一度の議会招集期間を短縮することにより頻繁に議会選挙を行うこ

と（當時は長くとも七年に一度総選挙を行う七年制議會であつた）などが要求された。議會改革運動は、議會においては主にホイッグ党や急進派議員によつて牽引された。

同心協會は自らの名で具体的な議會改革案を示すことはなかつた。むしろ同心協會は、議會改革に対し多様な意見を持つ人々を結びつける役割を果たそうとしていた。<sup>(17)</sup>この点については、「同心」(concentric)の意味について言及した、一八一八年の年次晚餐會におけるウィリアム・シェパードによる演説の以下の箇所が重要である。

これらの同心状の円〔晚餐會のチケットに記された標章〕が暗示しようとしているのは、我々の協會が多様な階層や様々な種類の人々から成る自由の友で構成されてお<sup>(18)</sup>り、それこそが議會改革という自由を獲得するための手段となつてゐるということです。

同心協會は議會改革を政治目標とし、その達成のために改革を支持する様々な人々と協力関係を取り結んでいこうとした。<sup>(19)</sup>同心協會はこのような協力関係をリヴァプール一都市内に留めずに、マンチェスターなどのランカシャー州における近隣諸都市をはじめ、ブリストルやロンドンなど遠隔地域にも広げようと試みていた。<sup>(20)</sup>

## 第二章…同心協會におけるホイッグ主義・急進主義

同心協會による改革運動の主要目的は、様々な階層や諸地域の改革派と連携を強めながら議會改革を達成することであつた。以下で詳論されるように、こうした同心協會の運動を正当化した政治的言説や理念、そして会員の政治的アイデンティティは、ホイッグ主義が土台となり形成されてゐた。また、同心協會のホイッグ主義は、理念のみならず、ホイッグ党議員との人的つながりからも看取できるものであつた。

同心協會によるホイッグ主義の表現の一例は「フォックス崇拜」(the cult of Fox)に見取れる。一七八〇年代からホイッグ党の指導者として重要な役割を担ったチャールズ・ジェイムズ・フォックスは一八〇六年に死去したのであるが、その後も彼の名は党のリーダーシップが不安定化した一九世紀初頭において、ホイッグ党議員の士気を高めるために繰り返し用いられた。ホイッグ党議員は自信の諸改革案を「フォックスの諸原理」に適うものと捉え党の一貫性を表象した。また、彼らはフォックスの存在感を常に意識するために肖像画や胸像を作成し、ブルックス・

クラブやフォックス・クラブといった彼らのロンドンの主要な会合場所や個人邸宅に飾った(図一)<sup>(21)</sup>。このようにフォックスを象徴化し敬い、時に自身の政策を正当化するために利用しようとする慣行は、近年研究者の間で「フォックス崇拝」という用語で呼ばれるようになってきている<sup>(22)</sup>。フォックス崇拝は同心協会にも共有されており、そのホイッグ主義の重要な要素となっていた。例えば、同心協会は会合の際に「チャールズ・ジェイムズ・フォックス(もしくは単に「フォックス氏」)の不死の記憶に」という祝杯を度々あげたし、一八〇六年から翌年までリヴァプール選出の下院議員を務め、同心協会会員の精神的支柱でもあったウィリアム・ロスコーは、自信の肖像画の中にフォックスの胸像を描き入れた(図二)<sup>(23)</sup>。さらに、同心協会の会合において、エジャトン・スミスは「言論の自由」の精神とフォックスの理念が関連することを強調し、ジェイムズ・ウィリアムズはフォックスの似顔絵を自身の時計に張り付け持ち歩いていた<sup>(24)</sup>。

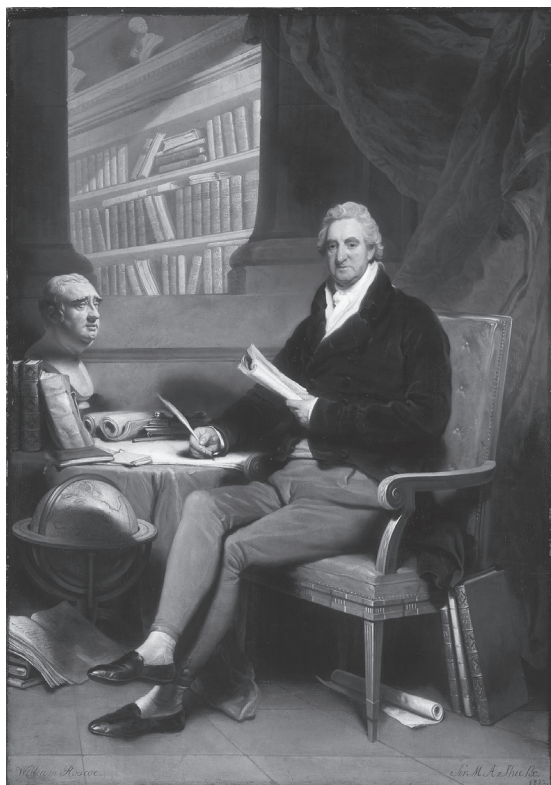
同心協会のホイッグ主義は、様々なホイッグ

一九世紀初頭イギリスにおける地方政治団体

【図一】<sup>(25)</sup>



【図二】<sup>(27)</sup>



系理論家が提示した国制論を参照する形でもあらわれた。例えば、ウィリアム・シェパードは一八一七年の年次晩餐会において、イギリスにおける君主制は「不死のロック〔ジョン・ロック…筆者〕によってたくみに論じられた諸原理」によってのみ擁護されると主張し、イギリス国制にホイッグ主義が深く関与していることを強調した。続けて彼は以下のように述べた。

統治に関するホイッグの一般原則 (Whig maxims) からの最初の重大な逸脱は、アメリカ革命戦争です。その戦争の目的は、(中略) 武力の行使によって代表なき課税という隷属的な教義を擁護することだったのです。

シェパードにとって、ジョージ三世治世期(一七六〇～一八二〇)は「ホイッグの一般原則」から逸脱した事件が続いた時期であつた。<sup>(28)</sup> 加えて、同心協会は議会改革の必要性を主張するために、存命するホイッグ党重要議員の言説をしばしば参照した。例えば、エジャトン・スミスは、一八一五年の年次晩餐会において、アースキン卿の演説を引用して以下のように述べた。

改革者の主要な諸目的についての最も簡潔かつ包括的な定義は、アースキン卿の演説の中に見つけることができるでしょう。卿は以下のように述べられました。「改革の原理とは選挙権のあり方を平等かつ単純にすることであり、また、個人的な腐敗が生じないくらい有権者の母体を十分に大きくしておくことです。また、選挙期間を『誘惑』を許さないくらい短くしておくことや、投票ができる場所を細分することであらゆる有権者が容易かつ混乱なく集まることができるようになることも必要でしょう。」<sup>(29)</sup>

同心協会にとって、自身の政策目標である議会改革を達成するために、議会ホイッグ党は非常に重要な存在であつた。一八一八年の年次晩餐会でシェパードは以下のように論じた。

私自身といたしましては、政党という組織に異議はありません。下院の野党側に座っている高い才能を持った紳士たち〔ホイッグ党議員…筆者〕の優秀さは、私の評価において減ずることはありません。<sup>(30)</sup>

シェパードにとって、議会ホイッグ党(もしくは政党その



もの）は、地方の独立性を脅かす存在というより、共有する政治目的を達成するために積極的に関わるべき対象であった。

こうした議會ホイッグ党への支持に関連して言えることは、同心協会が主に中産階級から構成されたにもかかわらず、貴族階級に対して一定の期待を寄せていたということである。議會ホイッグ党は改革に肯定的な集団であつた一方、その指導者及び中心議員の多くは貴族階級の出身であつた。同心協会は、キャロライン王妃事件を背景に開かれた一八二〇年の年次晩餐会において、「グレイ卿やアースキン卿など、女王と国制を忠実に擁護することで彼らの忠誠を示したみごとな貴族に」（強調点筆者）という祝杯をあげ、ホイッグ党議員を中心に王妃の特権剝奪を阻止した貴族階級を支持する立場を表明した。<sup>(32)</sup>さらに、改革を支持する貴族階級と友好関係を形成・維持しようとする同心協会の意向は、リヴァプールに地盤を持つセフトン卿やその息子であるモリニユ卿といった改革派貴族に対する祝杯を通じてあらわれた。こうした事例は、同心協会が自身の政策を達成するために、現政治体制下で中心的権力を構成した貴族・地主層と協力関係を築く必要があると考えていたことを示している。

ホイッグ主義を主張する同心協会は、当然のことながら

トリーと対抗する立場を取った。その一例は、一八一八年の年次晩餐会におけるスミスの以下の演説に見て取れる。

我々の協会の主な目的は、トリー諸原理という墮落を招く性質に抗うことです。それら諸原理の破滅的な諸結果は、国民にもたらされた重税と貧困に完全にあらわれています。<sup>(33)</sup>

こうした反トリー主義の言説は、「ピットの諸原理」（もしくは「ピット・システム」という言葉に置き換えられ、ウィリアム・ピット（フォックスと同じく一八〇六年に死去）と「ピットの弟子」で構成された現トリー政権を批判するために、同心協会の会合で度々用いられた。長期の対仏戦争とその結果生じた重税や経済的困窮は、ピットと彼の後継であることを自認するリヴァプール政権（一八一二～一八二七）の過ちとして繰り返し論じられた。<sup>(34)</sup>また、一七八〇年代において議會改革を支持したピットが後年変節したと皮肉るために、「議會改革、ピット氏が論じたところによると、それなしではどんなに誠実な者でもこの国の大臣であることはできないもの」という祝杯がわざわざあげられることもあった。<sup>(35)</sup>

さらに、同心協会は地元のトリー政治家にもしばしば批

判の予先を向けた。例えば、『マンチエスタ・ガーディアンの創始者であるジョン・エドワード・テイラーは、リヴァプール選出議員であるジョージ・カニングがマンチエスタの利害は実質的にリヴァプールによって代表されているため議会改革による議席再配分は必要ないと述べた（いわゆる「実質的代表論」）のに対し、マンチエスタは自身の代表を持つべきだと主張した<sup>(36)</sup>。また、ウィリアム・シェパードは、カニングの母親が年金を不正受給している可能性があることを指摘し、カニングを公金を横領する腐敗した政治家であると批判した<sup>(37)</sup>。また、シャパードは、リヴァプールの大富豪にしてカニングのパトロンであったジョン・グラッドストンをあらゆる改革に反対するピット・システム<sup>(38)</sup>の支持者と呼び攻撃した。

以上のように、同心協会は議会ホイッグ党を支援しつつ議会改革の必要性を訴えたのであるが、同心協会はホイッグ党全体を支持するというよりもむしろ「山岳派」と自称する党内小集団に、より強い共感を示した。一八〇〇年代末、野党勢力の拡大を目的にホイッグ党主流派は保守勢力であるグレンヴィル派と連合を組んだ<sup>(39)</sup>。山岳派ホイッグはこれに異を唱える議員で構成された。「山岳派」という言葉はフランス革命期のジャコバン派を連想させるが、山岳派ホイッグは国王の弑逆やイギリス国制の転覆を決して望

まなかった。一方、彼らはフランス革命をより平等な政治体制の構築と人民の権利の拡大を図った画期であったと相当程度肯定的に捉えていた。彼らは総勢二一名と少数ながらも、自らこそが「フォックスの真の後継集団」であるという認識を強く持ち、サミュエル・ワイトブレッドを中心に議会改革を中心とした諸改革を達成すべく尽力した。メンバーは貴族・ジェントリの出自を持つヘンリー・グレイ・ベネット、トマス・ウィリアム・コーク、第六代ベドフォード公爵の長男タヴィストック卿らに加え、ヘンリー・ブルーム、トマス・クリーヴィイ、サミュエル・ロミリなど中産階級的の出自を持った者で構成された。彼らは、議会内のみならず議会外での政治活動にも積極的であった。例えば、彼らは、ウェストミンスター選挙区選出の急進派下院議員であるサー・フランシス・バーデットやその支持者と議会改革達成を目指し、院外で協力関係を築いた。また、彼らはロバート・ウェイスマンやジョン・カートライト少佐らロンドン急進主義者の主催する会合に参加した<sup>(40)</sup>。

同心協会は改革志向の強い政治集団である山岳派ホイッグに期待し、多様な方法で関係を築こうとした。第一に、一八一二年の総選挙において、その直後に同心協会を設立することになる改革派は、ブルームとクリーヴィイを積極的に支援した<sup>(41)</sup>。さらに、実現はしなかったものの、アイルラ



ンド商人であるジェイムズ・ケニー・ケイシーは一八一六年

年の年次晩餐会において、次期議会議会選挙においてブルームを候補者に推したいと述べた。<sup>(42)</sup> 第二に、こうした縁からブルームは何度か同心協会の会合へ招待された。<sup>(43)</sup> また、彼が一八一五年七月にウインチェルシーから議席を得た直後に同心協会は祝勝晩餐会を開催し、ブルームとクリーヴィーに記念杯を贈呈した。<sup>(44)</sup> 第三に、同心協会は、ブルームやクリーヴィーに加え、ワイトブレッド、コーク、タヴィストック卿、リチャード・ウイルソン、ベドフォード卿といった山岳派ホイッグ（及び彼らと親しいホイッグ党議員）に名誉会員の称号を授与した。<sup>(45)</sup> 第四に、同心協会は多数の山岳派ホイッグに対し、年次晩餐会をはじめとした定期会合において多くの祝杯を捧げた。最も頻繁にその対象となったのはブルームで、同心協会は彼との間に特別親しい関係があることを強調した。<sup>(46)</sup> ブルーム以外にも、例えばクリーヴィーやワイトブレッドに対し多くの会合で祝杯があげられた。<sup>(47)</sup> また、史料が明らかにする限りでは名誉会員ではなかったが、同心協会はベネットに対してもブルームとほぼ同じ頻度で祝杯をあげた。<sup>(48)</sup>

このような山岳派ホイッグとの関係は、同心協会のホイッグ主義を特徴づける重要な要素となっていた。例えば、一八一八年の年次晩餐会において、ジェイムズ・ウイ

リアムズは以下のように述べた。

私が信じるに、議会改革によってのみ真の永続的な利益が得られます。（中略）トリーや、改革を恐れるトリーの心をもった見せかけだけのホイッグにこれが成しえるでしょうか？（中略）そんなはずはありません。それができるのは、真の純粋なホイッグだけです。彼らはこの国を本当に愛している、私が尊敬する人々です。フォックス氏はそのようなホイッグと認められていました。私は彼の死後の名声を崇拜しております。（中略）彼の最善の諸原理は私の心の中に保たれています。ワイトブレッド氏もそのようなホイッグでした。私は彼の死を嘆き悲しんでおります。（強調点原文イタリック）<sup>(49)</sup>

同心協会は概して、グレンヴィル派との関係を重視し改革推進に躊躇するホイッグ党議員を批判し、山岳派こそが「真の純粋なホイッグ」と考えた。同心協会はグレンヴィル卿をピットやカニングと同様のトリーと認識し、戦争で肥大したパトロネジを利用して公金を横領し、議会外での改革運動を制限した「六法」等の「抑圧的諸法」の成立に加担した人物であると批判した。<sup>(50)</sup> 同心協会にとっては、グ

レンンヴィル派と同盟を結ぶ議會ホイッグ主流派ではなく、山岳派ホイッグこそが頼るべき相手であったのである。

しかし、同心協会は、山岳派ホイッグを支持する一方で、議會改革という自身の政治目的の達成のために、ホイッグ党以外の政治団体との提携を模索することもあった。例えば、同心協会は、山岳派ホイッグが試みたように、ロンドン急進派との結びつきを得ようとした。その一例は、同心協会によるバーデットやカートライトへの名誉会員称号の授与に見て取ることができる。<sup>(51)</sup>特に前者に対しては、同心協会の会合で、ブルーム以上に高い頻度で祝杯があげられた。<sup>(52)</sup>また、同心協会は一八一八年の年次晩餐会にバーデットを招いた。この晩餐会には、同心協会が主催した会合のうち最多の約三二〇名の人々が参加した。<sup>(53)</sup>さらに、同心協会はこの晩餐会で初めて「人民主權」(Sovereignty of the People) という祝杯をあげ、改革派でも支持を躊躇しかねない理念の重要性を強調した。<sup>(54)</sup>

同心協会による急進主義との関わりは、より直接的な政治行動を通じてもあらわれた。これを最も端的に示す例が、ハムデン・クラブとの関わりである。ハムデン・クラブは、一八一一年の春にトマス・ノースモアによって設立された、議會改革を推進するための院外政治団体であった。設立当初は三ギニーという高い年会費を取る有産層中

心の穏健な組織であったが、カートライトが中心会員となった一八一三年五月以降は、一年制議會や直接納税者への選挙権拡大を主張するなどより急進的な団体へと変貌していった。<sup>(55)</sup>山岳派ホイッグもカートライト等のロンドン急進派と密に連絡を取っていたが、ハムデン・クラブに参加することには躊躇した。<sup>(56)</sup>しかし、同心協会は、一八一七年一月一四日に臨時会合を設け、ロンドン・ハムデン・クラブが主催する会合に代理人を送る決議をした。当時ロンドン・ハムデン・クラブは、全国的な改革運動の組織化を図っており、各改革派団体と連絡を取り代理人を派遣するように要請していた。同心協会は、これに積極的に応じ、トマス・ヒュームという地元の地主を代表として派遣した。加えてこの臨時会合では、仮にこの代理人会議が、一年制議會、男子普通選挙、秘密投票といった急進的な改革案を支持する決議をしたとしても、同心協会はそれを黙認するという内容の決議も行われた。<sup>(57)</sup>この代理人会議は、「王冠と錨」酒場 (Crown and Anchor Tavern) で同月二二日に行われた。全国から集まった代理人の数は五〇名弱であったが、カートライトを議長に、ウィリアム・コベット、ヘンリ・ハント、サミュエル・バンフォードなど名だたる急進主義者が一堂に会した。<sup>(58)</sup>この会議の結果、同月二八日にバーデットが下院にて議會改革動議の告知を行い、翌日か

らコ克蘭卿が下院に様々な都市から送られた議会改革を求める請願を提出し始めた<sup>(59)</sup>。こうした議会に対する働きかけは、同月二八日にロンドンの暴徒が摂政を襲ったことで議会エリートの多くが保守的態度を強めたため、結局失敗に終わった。加えて、秘密委員会の再設立、人身保護法の一時停止、扇動的集会禁止法の成立といった暴動直後に立法化された一連の抑圧的方策は、改革派政治団体の活動を抑制した<sup>(60)</sup>。同心協会は閉鎖を免れたものの、ハムデン・クラブは以後影響力を弱め、これが一因となって全国的急進主義運動は沈静化していった。

この同心協会と急進主義運動の関わりが示唆するのは、同心協会が議会ホイッグ党に頼る以外にも政治的選択肢を持ち得たということである。同心協会は、議会改革という政治目標の達成のために、自発的にロンドン急進主義者と手を組むことができた。しかし、同心協会の急進主義者に対する共感には一定の留保があったことには目を向けてもよいだろう。確かに、同心協会は、「同心協会の主要な目的、急進的改革」という祝杯にもあらわれているように「急進的改革」(radical reform)という言葉を好んで用いた<sup>(61)</sup>。しかし、同心協会は、極端な議会改革を支持する急進主義左派と一定の距離を保つよう注意していた。例えば、一八一六年の年次晩餐会でジェイムズ・ケニー・ケイシー

は以下のように論じた。

私たちはコベット氏やハント氏をまねるべきではありません。(中略) 私たちはいまだにチャールズ・フォックス氏の不死の名声に敬意を表しています。また、ハント氏やコベット氏はヘンリ・ブルーム氏に対し空威張りでこけおどしの中傷をしています。私たちは彼の才能、不屈の精神、そして高潔さに尊敬の念を抱いているのです。<sup>(62)</sup>

加えて、一八二〇年の年次晩餐会においては、エジャトン・スミスが「卑しくみじめな、陰口を好む一団」と同心協회를嘲笑したコベットを「品のない誹謗者」と呼び批判し返した一幕もあった<sup>(63)</sup>。こうした事例が示唆するように、同心協会はハムデン・クラブが呼びかけた代理人会議に代表を派遣した一方で、急進主義左派には辛辣な批判を浴びせていた。

また、同心協会が用いた「急進的改革」という用語の意味についても注意する必要がある。一八一五年八月三一日に開催された、ヘンリ・ブルームの議席獲得を祝う晩餐会において、ロスコーとブルームの関係に言及してウイリアム・シェパードは以下のように述べた。

ブルーム氏は議席を得てまもなく下院の改革の必要性について確信していると公言しましたが、しばらくの間この問題に対する彼の考え方は限定的であったと言えます。しかし、精力的で啓蒙されたあらゆる善なる原理の唱道者ロスコー氏とその問題について自由で親密な議論を行ったことで、ブルーム氏は急進的<sup>(64)</sup>改革(radical reform)という大義へ転じることになったのです。(強調点筆者)

シェパードによると、ロスコーの影響でブルームは「急進的<sup>(65)</sup>改革」の推進者になった。彼は地方の名望家が議会政治家に対し影響を与えたという逸話を挿入することで、地域社会のある種の自負心のようなものを強調しようとしたのかもしれない。しかし、より重要であるのは、ブルームとロスコーは両者ともに、一年制議会や男子普通選挙を危険視していたということである。彼らは比較的穏健な議会改革支持者であった<sup>(66)</sup>。同心協会は、「急進的<sup>(67)</sup>改革」の重要性を主張した一方で、イギリス国制を根底から覆しかねない極端な議会改革案を支持する急進主義左派とは異なる政治的スタンスを選び取るうとしていたのである。

## 結びに代えて

以上の考察で明らかになったことから、冒頭で紹介した先行研究による諸解釈を再検討したい。同心協会は議会改革の達成を目指して設立されたリヴァプールの政治結社であった。同心協会は議会ホイッグ党、わけても山岳派ホイッグを強く支持したが、自身の政策のためにロンドン急進主義者との協力関係を模索することもあった。このように同心協会が自発的に政治行動を選択できた事実、オゴアマンやフィリップス、さらにはテイラーが指摘したように、議政党と地方政治団体は互いに自律した政治組織であったことを具体的に例証している。しかし、同心協会を言説・理念・アイデンティティの観点も含め検討した結果、テイラーが強調したような「政党嫌悪」は明らかにならなかった。むしろ、同心協会は「フォックス崇拜」などを通じて、「地方ホイッグ」としてのアイデンティティを自ら獲得していったと考えられる。彼らは、積極的に山岳派ホイッグを中心とするホイッグ党議員と関係を構築しようとし、議会トリー党やリヴァプールのトリー支持者と対抗関係にあることを強調した。また、同心協会は「政党」という概念も肯定的な意味で用いることができた。彼ら

は、議会改革の達成を求めて選択的にロンドン急進主義者との提携を模索したが、ウィリアム・コベットやヘンリ・ハントなどの急進主義者とは一線を画す政治的立場を保持した。結局、同心協会にとって、議会ホイッグ党は議会改革という目的を遂行するための重要な政治的手段であり続けたのである。

同心協会は一八二二年末に実質的に政治活動を終えた。一八二〇年代初頭にイギリス国内の経済状況が好転し全国的に急進主義運動が衰退してゆく中、同心協会が議会改革に向けた活動を継続することは難しかった。ウィリアム・シェパードらリヴァプール改革派が再び大きな議会改革運動に身を投じることになるのは、議会ホイッグ党が一八三〇年十一月に政権に返り咲き、翌年三月に選挙法改正法案を提示して以降のことであった。このように議会改革の現実的な可能性が開けてきた時、リヴァプールの「地方ホイッグ」はどのような政治的理念や政治行動を展開したのだろうか。これについては今後の研究課題としたい。

## 註

- (1) Frank O'Gorman, *The Emergence of the British Two-Party System, 1760-1832* (London: Edward Arnold, 1982).
- (2) John A. Phillips, *Electoral Behavior in Unreformed*

一九世紀初頭イギリスにおける地方政治団体

*England: Plumbers, Splitters and Straights* (Princeton: Princeton University Press, 1982); *idem.*, *The Great Reform Bill in the Boroughs: English Electoral Behaviour 1818-1841* (Oxford: Clarendon Press, 1992); Frank O'Gorman, *Voters, Patrons and Parties: The Unreformed Electoral System of Hanoverian England, 1734-1832* (Oxford: Clarendon Press, 1989). なお、この結びつきが公式化し中央政党からのコントロールが厳密になるのは、一九世紀末のことである。Gary W. Cox, *The Efficient Secret: The Cabinet and the Development of Political Parties in Victorian England* (Cambridge: Cambridge University Press [CUP], 1987); Angus Hawkins, *British Party Politics, 1852-1886* (Basingstoke: Macmillan, 1998). この問題に関連する我が国の研究として、君塚直隆『イギリス二大政党制への道…後継首相の決定と「長老政治家」(有斐閣、一九九八年)。なお、一八世紀後半の政治文化の重要な変容については、青木康「ネーミア以後のイギリス一八世紀：一七六〇年代をめぐる最近の動向」『史学雑誌』、第八九編第一号（一九八〇年）、六四～八九頁。

- (3) 当時のイギリス議会選挙では、競争選挙になった場合記名投票制が採用された。多くの場合、選挙後に投票者名

簿が出版され、投票者の住所、職業、投票行動が公表された。なお、イギリスの議会選挙で秘密投票制が採用されるのは一八七二年以降のことである。

- (4) James Vernon, *Politics and the People: A Study in English Political Culture, 1815-1867* (Cambridge: CUP, 1993), chapter 4; Jon Lawrence and Miles Taylor, 'Introduction: Electoral Sociology and the Historians', in Jon Lawrence and Miles Taylor (eds.), *Party, State and Society: Electoral Behaviour in Britain since 1820* (Aldershot: Ashgate, 1997), 1-26.

- (5) 関連する事例研究として、正木慶介「チェンバ・ホイック・クラブ：一八二〇年代イギリスにおける地方ホイックと議会改革」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第六〇輯第四分冊（二〇一五年）「六九～八二頁」。

- (6) R. G. Thorne (ed.), *The House of Commons, 1790-1820* (5 vols., London: Secker & Warburg, 1986), 'Liverpool', online, accessed on 25 April 2016 (以下同資料のオンライン版を参照した場合、アクセスの日付は全ページと同一である)；D. R. Fisher (ed.), *The House of Commons, 1820-1832* (7 vols., Cambridge: CUP, 2009), 'Liverpool'; リヴァプール的人口は一八〇一年の時点で八三、〇〇〇であり、当時のイギリスにおいて、ロンドン（九五九、〇〇〇）に

次ぐ規模を誇った。Rosemary Sweet, *The English Town, 1680-1840: Government, Society and Culture* (Hawlow: Longman, 1999), 3-4. ただし、多くの歴史家がそうするよう、マンチェスターの人口（七五、〇〇〇）をサルフォードのそれ（二〇、〇〇〇）と合算すると、リヴァプールは第三位となる。ジョイス・M・エリス（松塚俊三、小西恵美三時眞貴子訳）『長し一八世紀のイギリス都市：一六八〇～一八四〇』（法政大学出版局、二〇〇八年）「二〇六～二〇七頁」。

- (7) Thorne, *Commons 1790-1820*, 'Liverpool'; Fisher, *Commons 1820-1832*, 'Liverpool'; E. M. Menzies, 'The Freeman Voter in Liverpool, 1802-1835', *Transactions of the Historic Society of Lancashire and Cheshire* [THSLC], 124 (1972), 85-107.

- (8) この時期の地方政治運動を検討した最近の研究として、Katrina Navickas, *Loyalism and Radicalism in Lancashire, 1798-1815* (Oxford: Clarendon Press, 2009).

- (9) *Liverpool Mercury* [LM], 22 January 1813. この時期にリヴァプールで設立された政治結社については以下を参照。B. Whittingham-Jones, 'Electioneering in Lancashire before the Secret Ballot: Liverpool's Political Clubs, 1812-1830', *THSLC*, 111 (1959), 117-138.



(10) *LM*, 22 January 1813, and 24 January 1817; Kevin Moore, 'Liverpool in the 'heroic age' of Popular Radicalism, 1815 to 1820', *THSLC*, 138 (1989), 138-139.

(11) Whittingham-Jones, 'Liverpool's Political Clubs', 131.

(12) *LM*, 22 January 1813. リヴァプールにおける奴隷貿易問題に関しては、田村理「イギリス奴隷貿易廃止運動の歴史的意義：リヴァプールのウィリアム・ロスコーを中心に」、博士論文（北海道大学、二〇一五年）；S. G. Checkland, 'American versus West Indian Traders in Liverpool, 1793-1815', *Journal of Economical History*, 18 (1958), 141-160. なお、以上六点の政治目標の他に、政治的・宗教的改革を促進する目的で全国的な教育制度が確立されるべきだとする主張も見られた。*LM*, 8 December 1815, and 15 January 1819.

(13) *Ibid.*, 15 June 1821.

(14) *Ibid.*, 8 December 1820. この事件に関する邦語文献としては、古賀秀男『キャロライン王妃事件：へ虐げられたイギリス王妃』の生涯をとらえ直す』（人文書院、二〇〇六年）が詳しい。

(15) Whittingham-Jones, 'Liverpool's Political Clubs', 131; *LM*, 16 April 1819. なお、同心協会は設立直後の一八一二年十二月一日にヘンリー・ブルームとトマス・クリーヴィーに一九世紀初頭イギリスにおける地方政治団体

書簡を送り、両者を名誉会員として迎える意向を示した。また、同書簡には同心協会の政策目標六点が記され、議会改革は「こりわけ」(above all) 重要な政策とされた。

*Ibid.*, 22 January 1813.

(16) イングランドの選挙区は州選挙区と都市選挙区、及びケンブリッジ・オックスフォード両大学の大学選挙区に分かれていた。州選挙区では年価値四〇シリングの土地を自由保有している者が有権者となったのに対し、都市選挙区の有権者資格は統一されていなかった。都市選挙区の一つであるリヴァプールでは、正式市民のみが有権者の資格を与えられた。正式市民となるには、父親が正式市民であるか、正式市民である親方のもとで徒弟奉公をするかのいずれかが求められた。John Cannon, *Parliamentary Reform 1640-1832* (Cambridge: CUP, 1973), 1-5; 田村「イギリス奴隷貿易」四一頁；O'Gorman, *Voters, Patrons and Parties*, 27-67.

(17) 会員が会合の際に個別に支持を表明した議会改革案としては、主に、より頻繁な選挙（一年制議会もしくは三年制議会）、選挙権の拡大（主に家屋所有者に対し）、秘密投票があげられる。*LM*, 6 December 1816, 11 December 1818, and 11 January 1822.

(18) *Ibid.*, 11 December 1818.

- (19) へれにこつて、ロシヤト・ノースの演説も参照。 *Ibid.*, 11 December 1818, and 21 January 1820.
- (20) *Ibid.*, 18 December 1820.
- (21) 両クラブについては以下の文献を参照。 Philip Ziegler and Desmond Seward (eds), *Brooks: A Social History* (London: Constable, 1991); Charles Sebag-Montefiore, *Charles James Fox, Brooks and Whiggery, The Fox Club* (London: printed for the club members, 2006).
- (22) 代表的な研究として、N. B. Penny, 'The Whig Cult of Fox in Early Nineteenth-Century Sculpture', *Past & Present*, 70 (1976), 94-105.
- (23) 史料が明らかにする限り、ロスコー自身は同心協会の会員ではなかったようである。しかし、ロスコーは長年にわたりリヴァプールの改革運動を牽引してきた第一人者であり、彼よりも若い世代に属す改革派（その多くは同心協会の会員であった）は彼に対し多大な尊敬の念をよせていた。同心協会のあらゆる会合において、彼らの目標とする改革としては関連付けられながらロスコーに対する祝杯があげられた。例えば *LM*, 11 December 1818 を参照。また、シェパードなど同心協会の会員は「ロスコー・サークル」というユニテリアン派の改革派団体に属していた。 *Oxford Dictionary of National Biography* [ODNB], 'Roscoe Circle', online, accessed on 25 April 2016.
- (24) *LM*, 3 June 1814, and 8 September 1815.
- (25) *Ibid.*, 11 December 1818.
- (26) *The Hon. Charles James Fox*, by Joseph Nollekens (bust, made in 1802-3), <http://collections.vam.ac.uk/item/O349295/the-hon-charles-james-fox-bust-nollekens-joseph/>, online, accessed on 3 July 2016.
- (27) *Portrait of William Roscoe*, by Sir Martin Archer Shee (oil on canvas, painted in 1815-1817), [https://en.wikipedia.org/wiki/Martin\\_Archer\\_Shee](https://en.wikipedia.org/wiki/Martin_Archer_Shee), online, accessed on 3 July 2016.
- (28) *LM*, 26 December 1817.
- (29) *Ibid.*, 8 December 1815. 544 のアースキン卿の演説は「人民の友協会」(Association of the Friends of the People) という議会改革を目指すホイッグ系結社の請願をグレイ伯爵（当時はチャールズ・グレイ）が一七九三年五月八日に下院に提出した際に行われた。この討議においてアースキンはグレイの動議支持者であった。 William Jones, *Biographical Sketches of the Reform Minsters; With a History of the Passing of the Reform Bills, and a View of the State of Europe from the Close of 1831* (London: H. Fisher, R. Fisher, and P. Jackson, 1832), 13-15.

- (30) *L.M.* 11 December 1818.
- (31) *Ibid.*, 8 December 1820.
- (32) *Ibid.*, 8 December 1815, 11 December 1818, and 15 January and 16 April 1819. なお、リヴァプール近隣地域の改革派貴族に対しても同様の例が見られた。例えば、チェシヤに所領を持つクロウナ卿に対して同心協会は「クロウナ卿とチェシヤ・ホイック・クラブに」という祝杯をあげた。*Ibid.*, 27 December 1822. 加えて、王室の中でも熱心な改革派であり、一八二〇年と一八二二年にノーフォーク・フォックス・クラブ主催によるフォックス生誕記念晩餐会にも参加するほどホイックと近い関係にあったサセックス公爵に対しても、同心協会は「サセックス公爵と、現王室を王位につけた諸原理に忠実なままである王室の方々に」と祝杯をあげた。*Morning Chronicle*, 26 January 1820, and 26 January 1822; *L.M.*, 8 December 1815, 6 December 1816, 11 December 1818, and 16 April 1819.
- (33) *Ibid.*, 11 December 1818.
- (34) *Ibid.*, 3 June 1814, and 6 December 1816.
- (35) *Ibid.*, 14 April 1815.
- (36) *Ibid.*, 11 December 1818.
- (37) *Ibid.*, 21 January 1820.

一九世紀初頭イギリスにおける地方政治団体

- (38) *Ibid.*, 11 January 1822, and 27 December 1822.
- (39) 議会ホイック党とグレンヴィル派の連携については、J. Sack, *The Grenvilles, 1801-29: Party Politics and Factionalism in the Age of Pitt and Liverpool* (Urbana: University of Illinois Press, 1979) を参照。
- (40) Dean Rapp, 'The Left Wing Whigs: Whitbread, the Mountain and Reform, 1809-1815', *Journal of British Studies*, 21 (1982), 35-66.
- (41) *L.M.* 2 October 1812. ロスコローは両候補を擁立した張本人であった。また、セフトン卿も彼らを熱心に支援した。Thorne, *Commons 1790-1820*, Liverpool.
- (42) *L.M.* 6 December 1816.
- (43) *Ibid.*, 14 April 1815.
- (44) *Ibid.*, 8 September 1815.
- (45) *Ibid.*, 22 January 1813, 20 May 1814, and 6 August 1819.
- (46) *Ibid.*, 6 December 1816.
- (47) 例えば、*ibid.*, 8 December 1815 を参照。
- (48) 同心協会は九度の会合でベネットに、一〇度の会合でブルームに祝杯をあげた。
- (49) *Ibid.*, 11 December 1818.
- (50) *Ibid.*, 21 January 1820.
- (51) *Ibid.*, 6 August 1813.

- (52) *Ibid.*, 8 September 1815. なお、史料が明らかにする限り、同心協会は九度の会合でカートライイトに、一六度の会合でバーデットに祝杯をあげた。
- (53) *Ibid.*, 11 December 1818.
- (54) ただし、同心協会は、この祝杯の直前に「国王」（第一番目の祝杯）と「摂政」（第二番目）に対し祝杯をあげ、さらには直後に「国制」、完全なる国制（国制以外は何もなし）（第四番目）と祝杯を続けることば、「人民主権」が国制への批判を意味しないことを強調した。*Ibid.*, 11 December 1818. なお、この時以外に「人民主権」の祝杯があげられたのは一八一九年一月の会合の際であった（「国王」についで二番目）。*Ibid.*, 15 January 1819. 一方、唯一「合法的な権力の源泉」という祝杯は、同心協会の会合ではかなり一般的であった。*Ibid.*, 14 April 1815.
- (55) N. C. Miller, 'Major John Cartwright and the Forming of the Hampden Club', *Historical Journal*, 17 (1974), 615-619.
- (56) Rapp, 'The Left-Wing Whigs', 56.
- (57) *LM*, 24 January 1817.
- (58) この代理人会議では、家屋所有者への選挙権拡大、選挙区の再編（各選挙区から一人の代表）、一年制議会、秘密投票、財産ではなく徳と能力（virtue and talent）による議員資格が決議された。*Morning Chronicle*, 23 January 1817.
- (59) E. P. Thompson, *The Making of the English Working Class*, (London, 1980, 1st edn., published in 1963), 697-699, 705.
- (60) Thorne, *Commons 1790-1820*, III, 310; N. C. Miller, 'John Cartwright and Radical Parliamentary Reform, 1808-1819', *English Historical Review*, 83 (1968), 724; William Cobbett and Thomas Curson Hansard (eds.), *Parliamentary Debates, 1803-1820*, 41 vols. (1803-1820), XXXV, 78-99.
- (61) Thompson, *The Making*, 699-700.
- (62) *LM*, 8 September 1815.
- (63) *Ibid.*, 6 December 1816.
- (64) *Ibid.*, 21 January 1820.
- (65) *Ibid.*, 8 September 1815.
- (66) ODNB, 'Henry Peter Brougham'; Thorne, *Commons 1790-1820*, 'William Roscoe'.